



乳幼児期の非認知能力

園長 山中文

平成29年に、幼稚園の「幼稚園教育要領」、保育園の「保育所保育指針」、認定こども園の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、そして小・中学校の「学習指導要領」が一斉に改訂されました。

今回重要視されたことのひとつが乳幼児期の教育です。中でも、乳幼児期の非認知能力の育成に注目が集まっています。非認知能力ってなんでしょう？あきらめずにやりきろうとする粘り強さや忍耐力、他者と協力できる社会性、失敗しても切り返しができる気持ちのコントロール、意欲等がそれに該当するようです。

これらは学習できるものではないととらえられていましたが、最近では、学習で得られるということがわかってきました。たとえば、「無気力」は、失敗を度重ねると、「どんなに頑張ってもダメなんだ」という自己肯定感を学んでしまいます。逆に、少しずつ成功する体験を積んで、努力の有効性が実感できれば、意欲が育ちます。つまり、意欲は学習されるというわけです。このような非認知能力を乳幼児期に培っておくと、将来問題行動が少なく、理性的で試験スコアが高い、というようなデータがいくつか出てきたそうです。保育・教育現場やご家庭でもそれらの育ちについては大事に考えていきたいものです。

ただ、だからといって、「がんばれがんばれ」とか「意欲を持て」と大人がけしかけるのは間違いです。子どもは萎縮していくばかりでしょう。子どもがやりたいことをいかに掬い上げて次につなげていくか、そこでの見守りや声かけがとても重要です。

年少クラスで、ある年少さんがお弁当に模したものを作りました。段ボールで冷蔵庫も作ってその弁当を入れたいということになり、担任の先生に相談しながら、段ボール冷蔵庫に棚を苦勞して付け、ドアに取っ手もつけました。そして、もっとたくさんのお弁当を入れて販売しようということになり、何人かの子どもたちと一緒にお弁当を増やし、レジも持ってきて販売が始まりました。担任の先生は、その過程で、子どもが「したい」と言うことに応えながら、また、子どもが「こうしてみようか」という考えに「そうだね」と共感しながら、そして、子どもが気付いていないことには「これはどうしたらいいかなあ」と問いながら、少しずつ子どもの遊びを広げていっていました。幼稚園ならではの教育の在り方であり、まさに粘り強さや意欲や社会性が培われている一コマです。

ご家庭では子どもより先に手を出したい口を出したい、ということが多いと思います。でも、一步退いて、どうしたいのか、何をしようとしているのか、子どもの目線で追って考えるというのは、子どもの非認知能力の育成にとっても大切なことでしょう。

また、もう一つ忘れてはならないのは、非認知能力は、それだけでは育たないということです。非認知能力は認知能力に支えられ、また認知能力は非認知能力に支えられます。先の子どもは、教師の援助によって、どうやって棚を作るか、冷蔵庫には他に何がいるか、販売していくにはまだ弁当を作らなければならない、レジも必要だ、ということに次々に気づいていきました。そのような気づきが、次の意欲につながっています。何に気付いたか、何を知らうとしているか等を合わせて見ていきたいものですね。

